

遅ればせながら、武井彩佳『歴史修正主義——ヒトラー賛美、ホロコースト否定論から法規制まで』（中公新書、2021年）を読んだ。この本は刊行直後から広い範囲で反響を呼んでおり、私もずっと気になっていたのだが、諸事に取り紛れて後回しにしていた。この本が広く話題になったのは、刊行に先だつ時期に日本でも「歴史修正主義」論争が言論界で注目を浴びていた——「歴史戦」という言葉を使う人さえもいる——という事情がある。また、刊行後まもない時期に始まったウクライナにおける戦争は、「歴史をめぐる争い」が本物の戦争になることもあるのだという厳粛な事実を思い知らせた。

「歴史修正主義」あるいはより簡略に「修正主義」という言葉は、異なるニュアンスをもつ種々の意味で使われる。端的な二つの例を挙げるなら、「まともな学問的論争」の一環としての通説批判という意味で「修正主義」の語が使われることもあれば、「およそ学問的ならざる、でたらめな政治的主張」という意味で「歴史修正主義」の語が使われることもある。後者はむしろ「否定論」と呼ぶ方が適切なのかもしれないが（特に「ホロコースト否定論」）、本書の中心部分では、後者の意味での「歴史修正主義」が主題となっている。厄介なのは、この2種類の「歴史修正主義」が完全に無縁なものとして峻別されるかということ、そう簡単ではないという点である。同じ人物が最初のうちは「まともな歴史家」として独自の探求をしているうちに、いつのまにか「怪しげな陰謀論」にはまり込んだという例が本書の第一章で紹介されている（H・E・バーンズ）。また、ホロコースト否定論の主張は100%の嘘というよりも、5割は事実、3割は真偽不明、2割が完全な嘘からなるといった説明もある（91頁）。そういったことを考えると、2種類の「歴史修正主義」の間に一線を引くのはそう簡単ではないということになりそうだが、それでも線を引くことはできるし、引かなくてはならないというのが、本書の中心部分の主張である。それは、何といてもホロコーストという圧倒的な歴史的事実があり、それをめぐって長年にわたって膨大な研究が積み重ねられて、研究者間に解釈や意見の不一致がいくらあっても「これだけは確実だ」という共通見解が形成されていること、そして、それに挑戦する「否定論」は、学問的情熱ではなくヘイト感情に基礎をおいた「悪意」から出発していることが明らかだからである。

本書は、事例としてはホロコースト、舞台としてはドイツとフランスを中心としながら、それ以外のさまざまな事例および諸地域の問題にも触れている。著者は本書以前にも数冊の関連図書——私が読んだのは、『戦後ドイツのユダヤ人』（白水社、2005年）と『〈和解〉のリアルポリティクス——ドイツ人とユダヤ人』（みすず書房、2017年）の二冊——を出しており、本書もそうした蓄積を背景にしているだけに、ホロコーストおよびそれをめぐるヨーロッパ諸国での議論の部分が最も充実しており、教えられるところが大きい。これに対して、ソ連史やオスマン帝国下のアルメニア人虐殺に触れた個所は、やむを得ぬことながら相対的には浅い印象があり、ところによっては不正確だったりする。そのこと自体は小さな瑕疵であり、それをあげつらっても仕方がないが、論争的でデリケートな主題を扱った本であるだけに、堅実な個所とそれほどでもない個所とがあるということは確認しておいた方がよいだろう。

本書の中心部分の叙述を追っていると、「〔悪しき意味での〕歴史修正主義」は一種の精神病理ではないかという印象が生じる。だとすると、そのような「歴史修正主義」論者に

対しては、ただ単に「君の言うことはまるででたらめで、そんなことを主張するのはおよそまともでない」と指摘するだけでなく、そうした病理がある範囲で広がっているのはどうしてか、そしてそのような病的な心理を解きほぐしていくにはどうしたらよいかを考える必要があるのではないだろうか。もちろん、それは容易なわざではない。だが、どんなに困難であろうと、とにかくそのような方向での試みを進めない限り、病理現象はますます凝り固まった形で広がっていくおそれがあるように思われてならない。

多くの主題を取り上げた本書は、その最後近くでロシア・東欧諸国における旧共産主義体制の評価の問題に触れている。ここまで視野を広げた労は多としたい。ただ、ナチズムの歴史やホロコーストに関しては長年にわたる膨大な研究の積み重ねによって、いくら歴史観や解釈を異にするとしても「これだけは確実に確認できる」という核のようなものがあり、それを否定するのは「悪質な歴史の歪曲」だということを比較的容易に指摘できるのに対し、近年のロシア・東欧諸国における歴史論争についてはこれと同じことを言うことはできない。もちろん共産主義諸国の歴史についても、それなりの学問的蓄積があることは踏まえておかななくてはならないが、その成果は歴史家の間でさえも十分共有されているとは言い難い。そして、論争に関与している人たちはしばしば「自分たちは真摯な探求を行なっているのだが、あいつらは悪質な歪曲を進めている」という形で論争しあっている。こうした論争を取り扱おうと思うなら、ホロコースト否定論よりももっと多面的でデリケートな接近が必要となる。もちろん、それはドイツ史を本業とする著者の責任というよりも、われわれの責任である。

本書が刊行された 2021 年時点で、ロシアとウクライナの間では、歴史解釈をめぐるかなり激しい言論戦が繰り広げられていた。そして、本書刊行から半年も経たないうちに、それは本物の戦争に転化した。「かなり激しい言論戦」が「本物の戦争」に転化するのとはもともと必然だったのか、それともそこにはある種の飛躍があったのか——これはわれわれに残された重い問いである。

20220714

戦争のさなかで。

2 月下旬に始まったロシア・ウクライナ戦争（ロシアによる侵略戦争とウクライナによる防衛戦争）は多くの人に「居ても立ってもいられない」という気持ちを引き起こしている。「何というひどいことが起きているのか」という感覚、そしてこのように悲惨な出来事に無関心であることは許されないという感覚は、多くの人に共通しているだろう。だが、そこから先、事態をどのように理解し、どのように反応するかという点については、幾重もの相違点が人々を引き裂いている。

ロシアによる戦争を非難するという限りでは大多数の人が一致しているが、アメリカや NATO にも批判すべき点があるということを重視するのか、それともそんなことを言うのはロシア免罪論につながるから、そういうことを言うべきでないと考えるのか、ウクライナの被害に心を痛み、共感を寄せるのは大多数の人に共通の心情だが、ひたすらウクライナの肯定的側面に注目するのか、それとも批判すべき点は批判するという態度をとるか、あるいはそれは被害者をおとしめることになるからそんなことは言うべきでない

と考えるか、

大量の流血や破壊に心を痛め、早くそれが終わってほしいと願うのは当然として、一刻も早い停戦が望ましいと考えるか、それとも不公正な停戦では意味がないので公正な和平につながるような停戦を求める（裏を返せば、それが可能になるまで戦い続けるべきだと考える）か、

軍事というものは厭わしいものであり、そんな事柄に熱中などしてはられないと感じるか、むしろ軍事を積極的に論じるべきだと考えるか、

歴史にさかのぼるなら、ロシア帝国、ソ連、そしてプーチン政権の軌跡をどう見るか、そこには一貫した侵略への衝動があるのか、それともそうした歴史的背景だけでは現在の事態は説明しきれないと考えるか、

大規模な戦争が続いているという現実の中で、今後の安全保障をどのように考えるか（世界規模でも日本国内でも）、

その他その他、とても数え上げきれない論点があり、それらが人々を引き裂いている。こうした問題をめぐって各人各様の見解が提示されるのは自然なことであり、異とするに足りない。だが、ややもすれば他者の見解を誇張気味に受け取って、「お前の言うことは、邪を正と言いくるめるようなもので、まるで話にならない」といった調子のトゲトゲしい議論が少なくないように思えて、気になる。私自身は最新の情勢について特段の見識を持っているわけではなく、こう見るべきだとか、こうするべきだなどという主張をするつもりはない。そうではあるが、何も言わずにもおれないので、対象地域の近現代史研究に長らく携わってきた経験から、中長期的文脈と現下の状況の連続／非連続という問題を中心に、ささやかな問題提起をこの間何度か行なってきたし、今後も続ける予定である。そうした個人的作業とは別に、3月15日に和田春樹氏の呼びかけで開かれた「ロシアのウクライナ侵攻を一日でも早く止めるために：日本は何をなすべきか」と題するオンライン討論会にも出席し、その場で提案された声明にも、若干の躊躇と留保を懐きながら、名を連ねた。

このとき発足した「憂慮する歴史家の会」は、その後メンバーが大幅に拡大し、当初とはいろいろな意味で変化を遂げながら今日に至っている。人数が増えた以上、その中に多様な考えの持ち主がいるのは当然だが、一部の有力メンバーが相当大声で積極的な発言をしているため、外から見ると、ある種の（かなり偏った）特定の立場に立つ運動であるかに映るようだ。しかし、実際には、上に挙げた一連の論点をめぐって参加者間には相当大きな分岐があり、誇張気味に言えばてんでんばらばらだというのが私の印象である。そういう大きな分岐があるにもかかわらず、それでも「会」が存続しているのは、とにかく事態を憂慮する、そしてできるだけ早い時期の戦闘停止と流血の最小化を切望する——何が「よりよい停戦」なのか、それがどのようにして達成されるかについては種々の見解があるにしても——という心情が最小限の一致点としてあるからだろう。心情だけで何ができるわけでもないが、憂慮と関心を共有する以上、関連する情報や意見を交換し続けることにはそれなりの意義がある。その上で、どういう見解をいただき、どのように行動するかは各人各様であってよい。これは「会」に名を連ねると否とに関わりなく、憂慮の念と深い関心をいただく人たちすべてについて原則的に同様ではないかというのが私の感覚である。ところが、実際には、さまざまな人たちの間で、「あいつらの立場は自分とは違う」という思

い込みからトゲトゲしい応酬が交わされている。これは残念なことだが、戦争という時代状況の中ではそういう感情論が優越しがちだというのも、時代の一つの特徴なのかもしれない。

20220722

昨日、医療介護福祉政策フォーラム主催の「社会保障研究会」という場で、「ロシア・ウクライナ戦争——背景・展開・現状」という講演を行なった（ウェビナー形式）。

このフォーラムの理事長である中村秀一氏（かつて厚生労働省で老健局長などをつとめて、退官後に現職）は、私の高校時代の同級生だった（大学入学も同期）。昔はわりと親しかったのだが、長いことほとんど音信不通で、お互いにたまに風の便りで近況を知るといった感じだった。このたび突然、ロシア・ウクライナ戦争について講演してほしいという依頼があったが、その時点ではこのフォーラムについて何も知らず、戦争と社会保障の間にどういう関係があるのかもよく分からず、やや戸惑った。説明によれば、この研究会に参加するのは医療・社会福祉をはじめ各界で活躍する人たちで、社会保障は平和あつてのものである以上、戦争の成り行きに無関心ではいけないとのことだった。

1ヵ月ほど前にルネサンス研究所で話したときはここ30年ほどの現代史にフォーカスし、続いて桜美林大学で話したときはもっと古い時期の歴史に力点をおいたが、今回はそういう風に時期を絞るのではなく、間口をかなり広げる一方、時間の制約を考慮して、論点がある程度絞るという形にしてみた。主たる参加者は学生や研究者たちよりもむしろ実務家を中心だったので、あえてやや大胆な仮説的展望にも触れてみた。ロシアにおける士気を低める要因と高める要因を考えるなら、士気を低める要因としては、何よりも先ず戦況が思わしくなく、多くの戦死者が出ていることが挙げられる。経済制裁の効果についていえば、現時点ではまだそれほど強く国民生活を直撃していない模様だが、今後拡大する可能性がある。他方、士気をむしろ上昇させる要因もいくつかある。初期の戦闘はウクライナ本土に攻め込むものであり、これは多くのロシア国民にとって理解しがたいものだった。これに対して、最近の戦闘はロシア語系住民の多い東部・南部に集中しているので、「同胞の防衛」という意識から支持しやすい。NATOのウクライナへの軍事支援が拡大するにつれて、「ウクライナと戦っている」というよりも「NATOと戦っている」という意識になり、これは国民の理解を得やすい。国際的孤立が深まることも、「こういう状況では、自国政府のまわりに結集しなくてはならない」という意識を広める。マスメディアなどでしばしばロシアの士気低下を指摘する報道が見られるが、そこには、「こうであってほしい」という願望を現実と取り違えた希望的観測の要素が紛れ込んでいるのではないか。大まかな印象論として、第一段階で手を広げすぎて無様な失敗をさらけ出したロシア軍は、第2段階では東部・南部に勢力を集中して態勢を立て直し、ウクライナ軍に対する相対優位を確保するに至ったように見える（士気も第一段階よりも高まった）。もっとも、それが今後も続くとは限らない。ウクライナへのNATOの武器支援が次第に拡充されている一方、ロシア側の武器は水準が低く、そろそろ限界に達しつつあるという観察もある。とすれば、ロシアが優勢だった第2段階からウクライナ優勢の第3段階へと移行しつつあるのかもしれない。いずれにしても、どこで止まるかは予断を許さない。陣取り合戦が続い

ているが、双方ともできるだけ自国側に有利な線での停戦を望むから、持続的な停戦の成立は容易でなく、泥沼的戦争が続く可能性が高いのではないか。

20220801

凶悪事件を起こした人間への眼差し。

大量の殺傷・放火その他の凶悪事件を起こした人間をどう見るかといえば、何よりも先ず非難し、断罪するのが当然の反応だろう。それはいうまでもないことだが、それだけで片付けたのでは、どうしてそういう事件が起きたのか、何が犯人を駆り立てていたのか、それをもたらした背景事情はどういうものだったのかなどといった問いが放置されてしまう。そうしたことを考えるなら、犯人をただ単に非難するだけでなく、どういう状況で、どのようにして犯人がその行動に走ったのかを理解するよう努める必要がある。もちろん、「理解する」ということは、その行動を容認するとか正当化するとかいったこととは全く別の話である。絶対に正当化はしないけれども、とにかく理解すべく務める——これは、たとえば秋葉原での大量殺傷事件（2008年）を起こした加藤智大（つい先日死刑が執行された）であれ、京都アニメーション放火殺人事件（2019年）の犯人であれ、安倍元首相を銃殺した山上徹也であれ、ウクライナへの侵略戦争を始めたプーチンであれ、原則的にはみな同じことである。

20220805

火曜から水曜にかけて〔8月2-3日〕、信濃木崎夏期大学というところに行って、「現代史を考える」という話をしてきた。コロナ禍が2年半前に始まって以来、東京を離れて旅行をするのはこれがはじめて。コロナ第7波の真っ盛りで、大分躊躇いもあったが、かねて「対面」を前提に準備が進められていて変更がきかないことと、2週間ほど前に第4回ワクチン接種を受け、おそらく抗体量が最も多い時期に当たると想定され、感染を完全に防げるとまではいなくても少なくとも重症化は防げるだろうと考えて、思い切って（もちろん基本的な対策は怠らないようにして）出かけることにした。途中、池袋駅は約1年ぶり、新宿駅はたぶん3年ぶりくらいに通って、なんとなく、いったん死んだ後によみがえって生前に知っていた場所を訪れたような奇妙な感覚に襲われた。東京はもとより松本もすごく暑かったが、目的地の木崎湖畔は涼しい高原で、避暑に来たような感じだった。信濃木崎夏期大学というのは大正期に始まる長い歴史を持っているとのことで、各種の成人大学のうちでも特に伝統のある催しらしい（今年は第105回）。参加者は地元の子供たちであり、運営には主に公立学校教員たちが携わっているようだ。企画面ではこれをバックアップしている公益財団法人の役員名簿を見ると、私が名を知っている人文社会系の研究者だけでも、財政学の神野直彦（理事長）をはじめ、歴史学の岸本美緒、法学の確井光明・松下淳一、音楽学の徳丸吉彦といった錚々たる顔ぶれが並んでいる。「現代史を考える」というテーマを選んだ後でそのことを知って、本物の歴史家である岸本氏がいる場で歴史について話すことになりそうだと気づき、相当なプレッシャーを覚えた。現地に着いたところ、彼女は東京で急用ができて、私と入れ替わりに帰京したとのことで、ホッとした

ような、気が抜けたような感じになった。それにしても、聴衆の中にそういう人がいる可能性を念頭において準備を進めたことは、緊張感のある有意義な体験だった。

それとは別に、構想を考えはじめた時点で予期されていなかったウクライナ戦争が2月に勃発したことにも頭を悩まされた。「現代史を語る」と銘打ちながら現下の戦争に触れないわけにはいかないが、さりとてこれを十分な歴史的考察の対象とするのはまだ早いという状況のなかで、四苦八苦しなから講義案を準備することになった。下の目次のうち、第1講と第2講では開戦以前に準備していた構想の中にところどころ戦争への言及をちりばめ、第3講では「記憶の政治」の重要な事例としてロシア・ウクライナ・ポーランドの相互関係を取り上げてみた。先ず3コマの講義をして、4コマ目は補足と質疑応答に充てるというスケジュールはかなりヘヴィーで、疲れもしたが、興味深い経験でもあった。3コマの構成は次の通り。

第1講：現代史／同時代史における時間感覚。

第2講：「短い20世紀」と「社会主義」。

第3講：記憶の政治／歴史の政治。

質疑応答では、講義内容に密接するものからまるで関係ないものまで含めて多種多様な質問が出されたが、わりとたっぶりした時間が割り当てられていたので、それらにゆっくりと答えながら講義の補足をすることができた。

20220810

雨ニモ負ケテ

風ニモ負ケテ

アチラニ気兼ネシ

コチラニ気兼ネシ

ペロペロベンガコウ云エバハイト云イ

ベロベロベンガアア云エバハイト云イ

アッチヘウロウロ

コッチヘウロウロ

ソノウチ進退谷マッテ

窮ソ猫ヲハム勢イデトビダシテユキ

オヒゲニサワッテ気ヲ失ウ

ソウイウモノニワタシハナリソウダ

ソウイウモノニホンハナリソウダ

この引用文を含む堀田善衛の小説『広場の孤独』は朝鮮戦争を背景としており、いまから70年ほど前の作品である。当時と今とでは国際情勢も知識人を取り巻く精神状況もまるで違っており、およそ遠い昔のように感じられる。私のような高齢者でも、読んでいて感情移入しにくいところがあるから、若い世代の人々にとってはまるでピンとこないという感想があっっておかしくない。それでいながら、政治の荒波に巻き込まれた知識人がのたうち回っている様の描写は、今でも共感できるところがないわけではない。中でも、ここに引用した戯れ歌——主人公があるところで耳にして、記憶にとどめたという体裁になっている

——は痛切な感覚を呼び起こす（末尾の一行だけであれば、日本という国を他人事風に眺めただけの戯文ととる余地があるが、その前に「そういうものに私はなりそうだ」とあることが痛切の感を深める）。70年の間に状況があまり変わらなかったのか、あるいはその間の大きな転変を経てまたもとに戻ってきたのか。

20220815

「広島・アウシュヴィッツ平和行進」について。

1962年から63年にかけて、4人の日本人が広島から出発してポーランドのオシフェンツィム＝アウシュヴィッツへと、世界各地を巡礼する行進をしたことがあった（「広島・アウシュヴィッツ平和行進」と呼ばれた）。私はこのことをリアルタイムでは全く知らなかったし、その後たまたま断片的に聞きかじっても、それはごく漠然たるイメージ以上のものではなかった。

私をはじめて多少なりとも具体性のある話を聞いたのは、「行進」からおよそ20年ほど経った時期のことである。当時、私は東大社会科学研究所の助手だったが、社研のある会合で和田春樹（当時社研教授）・加藤祐三（当時横浜市立大学教授）の両氏と同席する機会があった。二人は長年の親友だったらしく、和田氏は懐かしそうに、「加藤君は、あの広島・アウシュヴィッツ行進に参加していたんだよ」と語っていた。

これを聞いて多少身近な感覚が持てるようになったとはいえ、その後も、それ以上具体的なイメージはないままの状態が長く続いた。それがかなり大きく変わったのは、数十年後の2018年11月、加藤有子氏の組織した国際シンポジウム「ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶」に参加したときのことである（シンポジウムの記録は、加藤編『ホロコーストとヒロシマ』（みすず書房、2021年）として刊行された）。私はこのシンポジウムに出席したとき、ポーランド側発言者の報告に特に強い感銘を受け、直後に感想を書いたことがある。

それとは別に、加藤有子氏はシンポの趣旨説明および自己の報告で「広島・アウシュヴィッツ行進」に相当具体的に触れていた（中でも、「ヒロシマ・アウシュヴィッツ」というレトリックが「ヒロシマ・アウシュヴィッツ・南京」へといったん拡大した後に、近年では「南京」が脱落するようになったという指摘が印象的だった）。この報告を聞いたおかげで、「行進」に関する私のイメージは大分鮮明なものとなった。

それから更に数年を経て、ごく最近、林志弦（イム・ジヒョン）『犠牲者意識ナショナリズム——国境を超える「記憶」の戦争』（東洋経済新報社、2022年）を読み、その第4章に「行進」をとりまく政治的文脈に関する新鮮な解説があるのを見出した。それによれば、アウシュヴィッツは今でこそ「ダーク・ツーリズム」の代表的な行き先となっているが、当時はそれほどメジャーではなかった。そのような場所を最終目的地とする「平和行進」のアイデアを最初に出したのは、ポーランドのカトリック政治家フランコフスキで、彼は「パクス」という政治組織に属していた。「パクス」というのはポーランドに存在した二つのカトリック系政治組織の一つで、もう一つの「ズナーク」と並んで、統一労働者党（共産党）のヘゲモニー政党制を補完する従属政党の一つだったが、「ズナーク」がある程度の自主性を保持していたのに対し、「パクス」はより従属度が高かったとされる。ナ

チの暴虐を象徴する場所であるアウシュヴィッツを最終目的地とするという彼のアイデアは、純然たる宗教的平和主義の発露——日本ではそのような受け止め方が多かった——にとどまるものではなく、ポーランド共産党と一定の調整を経ていたものと考えられる。冷戦下で展開された「西側」世界に対抗する国際的平和運動の一環という意味では、これがポーランド当局に認可されたのは自然だった。カトリックが多数を占める一般ポーランド国民からすれば、ユダヤ人とドイツ人はともに他者であり、オシフェンツィム（アウシュヴィッツのポーランドでの名称）は特に記念すべき場所ではなかったが、冷戦下で展開された「西側」世界に対抗する国際的平和運動の一環という意味では、これがポーランド当局に認可されたのは自然だった。他面、日本側も冷戦の制約と無縁ではなかった。日本政府はこの行進団への旅券発給に難色を示したが、その理由は、ソ連の暴虐を示すカチンの森ではなく西ドイツ非難を含意するアウシュヴィッツを目的地とするのは妥当でないということだった。また、この「行進」が始まる1年前に、東ドイツ・ドレスデンの市長は広島市長に姉妹都市になることを提案していたが、広島はこれに応えなかった。戦時中に連合国から無差別爆撃をこうむったという点で両市には共通性があったが、この提案もその黙殺も、当時の冷戦の文脈の中に置かれていた。このように「行進」の背後には冷戦に関わる政治が作用していたが、参加者はそうした計算だけで動いていたわけではなかった。「行進」の途上でシンガポールに立ち寄った参加者たちは、日本軍に虐殺された中国系住民の遺骨発見に立ち会い、「ヒロシマの犠牲者」とだけアピールしているわけにはいかないという現実にぶつかった。

こういう記述を読むと、いろいろなことを考えさせられる。「行進」が企画された時代状況について加藤有子もイム・ジヒョンも簡単に言及しているが、これは60年安保闘争挫折後というタイミングだった。とすれば、日本の社会運動の指導者たちや活動家たちの間では、闘争の次の焦点をどこに求めるかでいろんな模索や論争があったことが想定される。いわゆる「帰郷運動」もその一つだが、「平和行進」もそうした文脈に置かれていたのかもしれない。それ以外に、長崎とアウシュヴィッツを結びつけるシンボルとされるコルベ神父の反ユダヤ主義との関わりの問題とか、どうして日本で特にコルベ神話が有力なのかといった論点をめぐっても種々の見解があるようだ。

やや政治的文脈に引きつけすぎた感想になってしまったかもしれない。当時、平和運動に関与した人々の多くは、運動の頂部にいる人たちの政治的思惑とは別に、もっと素朴に平和を希求していたのだろう。そうした感覚と政治とがどのような相互関係にあったのかという問題は、別個に考えなくてはならない。ここではただ、かつてほとんど全く知らなかった事項について、長い年月を挟んで少しずつ知識が増えてきたという経過自体に面白いものを感じたことから、若干の感想を羅列したにとどまる（イム・ジヒョンの書物自体については、できれば機会を改めて、もっと包括的に検討してみたい）。

20220825

林志弦（イム・ジヒョン）『犠牲者意識ナショナリズム——国境を超える「記憶」の戦争』（東洋経済新報社、2022年）を読んだ。

著者のイムは、ここ十数年の間に、「犠牲者意識ナショナリズム」「大衆独裁」などの論

争的概念を提起する多数の論文を発表して、日本でもわりとよく知られている（一例として、橋本伸也編『紛争化させられる過去』（岩波書店、2018年）にはイムの論文と私の論文がともに収録されているが、拙稿の他にも多くの収録論文がイムの議論を受ける形で論を展開している）。彼の文章は新奇性と論争挑発性を特徴としていて、読む人の神経を揺さぶるところがあるが、その議論が多数の個別論文として分散的に発表されていることから、全体像をつかみにくい憾みがあった。このほど、その議論の集大成というべき単著（一部に旧稿を利用しているが、全体としては書き下ろし）が公刊されたのは、その意味で大いに歓迎される（日本語版は、理論的色彩の濃い韓国語版の第一章を末尾の補論にまわすという工夫を施しているが、基本的には原書に忠実な翻訳のようだ）。

「犠牲者意識ナショナリズム (victimhood nationalism)」とは、「自分たちは犠牲者だ」という意識を核とするナショナリズムのことであり、ポーランド、韓国、イスラエル、日本、ドイツなど、あちこちの国で見られることが指摘されている。犠牲者意識の強調は他者への糾弾・責任追及を核として自国民を結集させるが、往々にして自国内での人々の立場の違いとか、「被害者」のはずの自分たち自身も加害者だった面があるのではないかという問題を見失うことになりやすい。また、「加害者」と見なされて糾弾される側も「自分たちこそ被害者／犠牲者だ」という意識から、糾弾に反撥することがよくある。この場合、両側のナショナリズムは政治的に対抗しあっているが、一方の高まりが他方を強めるという相互関係があり、両者は「敵対的な共犯関係」にある（韓国のナショナリズムと日本のナショナリズムが相互に刺激しあうことで相手を強めているのはその典型例）。ここまでは、著者の旧稿からかなりの程度既に知られていたことだが、本書では、視野を一段と拡大して広大な事例を取り上げることで「記憶のグローバル・ヒストリー」に挑み、論点もこれまで以上に広がっている。その全体像を紹介することは到底できないが、韓国と日本、ポーランドとドイツ、ドイツとイスラエル、ポーランドとイスラエルという一対の関係は、その枠を超えてグローバル・ヒストリーの次元へと広がっていくため、加害者と被害者という単純なペアの関係を越えた複合的で高次元のアプローチが必要だとしている点、また（これは以前からの議論の延長だが）実証史学的方法への批判が鮮明になり、「事実的真実 (factual truth)」と「物語的真実 (narrative truth)」の対置とか、歴史研究における「感情の転化 (emotional turn)」[「感情論的転回」とでも訳した方がよいのではないかという気がするが] というパラダイム・シフトが提唱されている点が目を引く。

取り上げられている論点が広大であるために、個々の点にこだわるなら、いろいろな疑問を出す余地があるのは当然だろう。そうした個別の疑問にどういう意味を付与すべきかも微妙だが、とりあえず気になった一つの点を挙げておこなら、全体としてはあらゆる登場人物をなで切りにして、「関連する全ての当事者を不快にさせる」とまで書かれているのに、若干の例外があるのではないかという気がした。一つはボスニア内戦における「民族浄化」に関して、セルビア人（だけ）が一方的な加害者だということが何の留保もなく書かれていて、この書き方は、他方当事者たるボシュニャク人が読むなら不快になるどころか快哉を叫ぶのではないかという気がする。もっと長く論じられているのは、1965年11月にポーランドのカトリック司教団がドイツの司教団に送った司牧書簡およびその余波であり、これは「大成功」という手放しの肯定的評価が与えられている。ブランドの東方政策、1970年の国交正常化、1989年のコールとマゾヴェツキによる平和メッセージ交換、1990

年のドイツ統一を契機としたオーデル・ナイセ線の国際的な再承認、2004年のポーランドのEU加盟などを経て、司牧書簡の歴史的意味はますます重要になったというのだが、この記述は単線的かつ楽観的すぎて、あまり納得できない（他の個所では、ポーランドの記憶法——ホロコーストへのポーランド民族の責任を指摘することは民族の名誉を汚すものだとして、その趣旨の発言を禁止して、物議を醸した——にも触れられているが、それとの関係は不明）。1965年司牧書簡をモデルに、ポーランドとウクライナが互いに赦しあうことを促す書簡が2005年に発表され、2013年にはポーランドのカトリック教会とウクライナの正教会が「互いに対する赦しと和解」を促す共同の和解宣言を発表したとも書かれているが、そのこととヴォルィニ虐殺をめぐるポーランド・ウクライナ論争の関係も不明である。

小さな点にこだわりすぎたかもしれない。あれこれの疑問や反撥を含めて論争を喚起する重要な野心作だということは間違いない。

20220908

昨日の朝日新聞夕刊文化面にゴルバチョフに関する拙文が載った。厳しい字数制限のため、あえて単純に割り切った書き方をしたが、いくつか独自の解釈を盛り込んであり、その解釈をめぐっては、おそらく専門家の間でも大きく議論が分かれ、論争が展開されるだろう。とりあえず主だった論争点を簡単に列挙するなら、次のようなものがある。

- ①ゴルバチョフ、エリツィン、プーチン3者（およびその時代）の相互関係をどう捉えるか。
- ②これら3者のソ連解体への関与はどういうものだったか、また彼らはそれをどう捉えたか。
- ③「ゴルバチョフは外国では評判が高く、ロシア国内では人気が高い」という通説はどこまで当たっているか。
- ④冷戦終焉およびドイツ統一におけるゴルバチョフ、レーガン、ブッシュらの役割はどういうものだったか、ブッシュはどこまでゴルバチョフと歩調をそろえていたか。
- ⑤ペレストロイカ期に起きたいくつかの軍事力行使と流血におけるゴルバチョフの役割はどういうものだったか。
- ⑥ウクライナ独立およびクリミア問題に関するゴルバチョフの立場はどういうものだったか。

これらはどれも複雑な問題群であり、どの一つをとっても、問題の諸相を細かく腑分けして考える必要がある。ここ数日の間に目にとまった追悼文は、一方では手放しの賛美（多くの場合、プーチンと対比）が多数を占め、他方では、「そんな風な理想化は嘘っぱちだ。実は、彼は言われるほど民主主義者でも平和主義者でもなかったのだ」といった感じの暴露があるが、どちらも今のところ単純化された極論にとどまっている。拙文では細部に立ち入った論証を省いて、敢えて自己流の暫定的結論らしきものを提示したが、その裏付けには相当量の丁寧な作業が必要となる。持続的に考えていきたい。

20220916

2年前に読んだ論文だが、櫻井義秀「戦後日本における二つの宗教右派運動——国際勝共連合と日本会議」（櫻井編『アジアの公共宗教』北海道大学出版会、2020年）を読み返してみた。統一教会＝勝共連合と日本会議のそれぞれについて、両者の共通性と差異を含めて丁寧に解説した論文であり、それらの背景、変遷、社会的影響などがきちんとまとめられている。これらの運動は「右傾化」の象徴とされることが多いが、社会全体の右傾化を代表しているわけではないことが指摘され、政治との関わりはやや誇張されているが、「保守政治家は人手や票田として右派宗教を利用し、右派宗教は政治家を動員して政策実現を図ったとアピールすることで勢力を誇示する」という関係だと述べられている。この論文が元来公表された2年前の状況を思い出してみると、日本会議は当時既に多くの人の注目を引いていたが、統一教会はむしろ忘れられがちだった。そして、政治との関わりについてやや誇張気味の見解が流布していたため、著者は過大評価を戒める必要を感じていたように見える。これに比して、今日では統一教会が一躍関心の的となっているが、日本会議との対比についてはあまり突っ込んだ議論がなく、政治との関わりについては過度な単純化が少なくない。著者はこの主題に関する代表的な研究者のようで、あちこちから取材要請がきているらしい。長年地味な研究を続けてきた人が、時ならぬ「ブーム」に巻き込まれてあちこちで公的発言をしなくてはならないというのはさぞ大変なことだろう。

20220921

多和田葉子の新聞小説『白鶴亮翅』ははじめのうちものすごく面白くて、毎日わくわくしながら読んでいた（その他の面に載っているニュースがウクライナの戦争をはじめとして気分を暗くするものばかりなので、この小説を読むことが新聞を読む唯一の楽しみだった）。ところが、途中で「アレッ」という感じになり、そうかと思ったら、あっけなく終わってしまい、肩透かしのような印象を抱いた。後になって気づいたことだが、登場人物の一人でロシアからやってきた女性がアリョーナという名になっているのは、ドストエフスキー『罪と罰』で殺される金貸しの老婆をうけたものであり、アリョーナに金をせびっているロージャはラスコーリニコフをうけている（ラスコーリニコフのフル・ネームはロディオン・ロマーヌィチ〔ロマノヴィチ〕・ラスコーリニコフで、ロディオンの愛称がロージャ）。多和田はもともと早稲田大学文学部露文科の卒業だから、そういうことは百も承知でこれを書いたはずである（そういえば、アリョーナが危うくロージャに殺されかける場面が出てきた）。おそらくこれ以外にも私の気づいていない伏線があちこちに張り巡らされていたのではないかという気がする。であってみればなおさら、周到に張られた伏線を存分に展開するなら、もっとずっと長い長編小説（それこそドストエフスキーばりの）になったのではないかと思われて、どうしてこんなに尻切れトンボで終わってしまったのか不思議な気がする。どういう事情でこうなったのかは分からないが、いつの日にか、多和田がこの続編を書く日は来るのだろうか。